

# 生まれてくれてありがとう

大学病院で、**口唇口蓋裂の手術にあたる中村教授。子どもたちへの治療、親の会『もみじ会』の活動、発展途上国への支援を通じて、手術を受ける子どもたち、その親、そしてすべての人々に伝えたいこと。**



**中村典史 (なかむらのりふみ)**  
鹿児島大学歯医学総合研究科、顎顔面機能再建学講座  
口腔顎顔面外科学分野、教授。  
1957年11月15日生まれ <出身地> 福岡県  
<好きな言葉> 志(こころざし)ある者は事ついに成る  
<好きな本> 柳澤桂子著「意識の進化とDNA」  
<趣味> テニス、登山  
<はまっていること> 男の手料理  
<ホームページ> 鹿児島大学口腔顎顔面外科  
<http://www.hal.kagoshima-u.ac.jp/Omf2/>

## ■自己肯定

**杉浦** それでは中村先生、先生、よろしくお願ひします。やばい、いきなり噛んでしまいました。

**中村** あはは、よろしくお願ひします。噛み合わせが悪いのかな？ぼくが治してあげようか？(笑)

**杉浦** いえいえ、大丈夫です。トーク&ライブでもよく噛むんですよ(笑)。

ところで中村先生は、この鹿児島大学病院で、教授として、歯科医師として、主にどんなお仕事をされているんですか？

**中村** 大学での仕事は、病院で口唇口蓋裂や口のがんなどの手術、外来診療、学生講義、医局の先生や大学院生との研究などです。

**杉浦** ありがとうございます。中村先生との出会いは、一昨年の11月、いつもお世話になっている佐藤先生が、鹿児島大学歯学部同窓会のイベントで、ぼくを呼んでいただいたときですね。

**中村** そうでしたよね。ぼくは、イベント自体は参加できなくて、懇親会でたまたま隣同士になったんですよ。あのときが初めてでしたね。



もみじ会の仲間たち

ない。自分を責めないでくださいね」って。

**杉浦** 親が自己否定していると、子どもにも伝わりますよね。ぼくも病気が違うんですけど、がんになったときに、母親が「自分が食べさせた物が悪かったのか」とか、「育て方が悪かったんじゃないか」と自分を責めていて、とても辛かったです。ぼくは大人だったから、「そうじゃないよ。お母さんのせいじゃないよ」と伝えることができたけど、子どもにはなかなかできないですよ。もしかしたら、「自分の存在が親を悲しませていて」と思って、そのことがさらに子どもたちを辛くさせてしまうかもしれない。

**中村** そうなんです。その負の連鎖、サイクルを変えてあげないといけない。まずは親御さんの心をケアして、お子さんに対して、自己を肯定できるようにするために、いろんな取り組みをしていく。「病気があってもそれが自分、すべて大丈夫なんだ」って思ってもらうためにね。『大丈夫だよ』の歌の中にあるように、「すべてがOK!」どんな自分もOK!すべてが必然で、すべてに意味があり。歩いた道も、今いるところも、これから行く道も何一つ無駄はない」と思ってもらいたいです。親御さんにも、お子さんにも。

**杉浦** 昨年の6月、『もみじ会』でトーク&ライブをさせてもらいましたが、そんな肯定的な雰囲気は作れたでしょうか？

**中村** いや、バッチリでしたね！馬場さん(今号に登場の馬場隆行さん)のお子さんの銀次郎くんなんか、車で『大丈夫だよ』を繰り返し聴きたいとせがむみたいですから。それに、あのうん〇お漏らしの歌も最高でした。子どもたちも大喜びですね。

**杉浦** 『ゴールデンパラダイス』ですね。この歌も自己肯定の歌ですからね。「うん、このままでいいよ。そう自分らしくね。君の代わりはどこにもいないから。力いっぱい笑おう。そう、思い切り輝いて。この世界はゴールデンパラダイス!」ですから。

**中村** 親が自分自身を肯定して、子どもに「大丈夫だよ」

と伝え、子どもの存在を肯定する。すると、子どもも「このままの自分でいい。生きている価値があるんだ」と思えて、親も「大丈夫だ」と思える。

**杉浦** なるほど、「大丈夫」の連鎖、サイクルだ。

**中村** それと、口唇口蓋裂の『もみじ会』の親子だけじゃなくて、病棟のがん患者さんもたくさん来られていて、何かこう「元気出していこう!病気に負けないでいこう!」という気持ちになれたみたいですよ。そんな方々にも「大丈夫だよ」という思いがすーっと入っていききましたね。それにあのとき、「命はやわじゃない!」と書かれたステッカーがたくさん売れて、病院のいたるところに貼られていますよ。

**杉浦** ありがとうございます。それから、あの会場がとても良い雰囲気でしたね。温かくて、優しくて、愛に満ち溢れていましたよね。『もみじ会』の方々を見ていて、お子さんへの愛が「すごいな」って思ったんです。親が子を見ているその眼差しがとても深く、慈愛に満ちていて、すごく感動しながら歌っていました。

**中村** そう言っていたらほんと嬉しんです。

**杉浦** こちらこそありがとうございます。そして、そんな素敵な『もみじ会』の目的は何でしょうか？

**中村** 杉浦さんのトーク&ライブの前のレクリエーションは、公園でのバーベキューでした。なぜこんなことをしているかっていうと、基本的に子どもたちに社会性を持たせたいんです。顔に病気があるので、どうしても親が「大事、大事」って育てて、子どもがなかなか外に行けないケースがある。一般的に口唇口蓋裂の子は、社会性に乏しく、自分を表現できない子も少なくないんですよ。子どもたちには、自分の持っている個性であるとか、あるいは能力を最大限に発揮しな

がら、自由に育って行ってほしいと思っています。そのため、皆が入っていきやすいように、着ぐるみ着て遊んだり、ゲームしたり、結構バカなことやっていますよ。

たんですよ。杉浦さんが歌ってらっしゃる姿を見ながら、『もみじ会』の雰囲気はやっぱりいいなと思ってね。それですぐにその場でお願ひしたんです。

**杉浦** とっても嬉しかったですし、びっくりしました。どうして多くの歌が歌がびつたりだと思われたんですか？

**中村** そうですね。口唇口蓋裂の子を持つ親御さんは「この子はどうなるんだろう」と不安もあるだろうし、また子どもたち自身も「自分が将来どうなるんだろう?」と不安なんです。そんな中、『大丈夫だよ』というフレーズが、杉浦さんの声との優しいメロディとともに、彼らの心にすーっと入っていくだろうと思っただけです。音楽は本当に力がありますから。

**杉浦** そんな風に思ってくれたんですか。

**中村** それとね、とくに親御さんに自己否定してほしくないんです。特にお母さんは、お子さんの病気のことを「自分が原因かな?」と、思ってしまっているんですよ。ぼくは言うんです。「そうじゃない。これはもつと大きな仕組みの中で起きる病気であって、人類の歴史の中で避けられない病気なんだ。だからお母さんのせいじゃ



**杉浦** ワイワイと楽しく遊ぶ中で、友達を作って、自分を表現できる環境を作ってあげられます。

**中村** そうなんです。手術をして顔をきれいにしているのが仕事の半分。残りの半分は、この『もみじ会』のように、子どもたちの自立をサポートすることです。親御さんと一緒に、病気があっても負けない心を育み、子どもたちがしっかりと自分の足で立って生きていける

提供	<p>株式会社 鈴木商事株</p> <p>豊橋市大橋通3の1112 053215511112</p>	<p>株式会社 エヒコ産業</p> <p>新城市乗本字坊貝津15 0536132105006</p>	<p>株式会社 太平洋セメント販売株</p> <p>名古屋市中区錦1丁目2の11 052123111045</p>	<p>株式会社 名古屋日建物産株</p> <p>名古屋市中区葵1の27の37 0521933511651</p>
----	--	--	---	--

ようにすること。そこが我々のいわゆるゴールですね。  
**杉浦** では、具体的にはどんな風に子どもたちに育ってほしいですか？

**中村** そうですね。多少偏見があるのに非常に伸びやかに育つての子や、社会に出て自分の持っているものを十分に発揮してる子もいるんですよ。病気になることをマイナス要素にして、そのために自己否定するのではなく、病気になるけど、それを治療しながら克服してきた経験から、周りの人を支えている人もいます。いずれにせよ、そういう自分の持っているものを自由に出せるような人になってほしい。

**杉浦** なるほど、すべてをプラスに捉えるんですね。  
**中村** 病気の部分はあっても、それを含めて自分のキャラクターですし、病気そのものがその子の価値を全く変えたりしないから。

### ■みんな特別

**杉浦** では、中村先生、「口唇口蓋裂」という病気のことをもう少し詳しく教えて頂けないでしょうか？

**中村** はい。口唇口蓋裂の子は日本人だと500人から600人に1人生まれるんですね。お顔、特に口唇と口蓋(口の中の上壁)の形成の異常です。元々赤ちゃんは、お母さんの卵子とお父さんの精子が受精して、お母さんのお腹の中で一つの丸い細胞でスタートするんですね。それが形を変えてきて、人間の顔の形になります。その時に最初は皆、口も鼻もバラバラに割れてるんです。

**杉浦** 割れてる？

**中村** そうなんです。それが、赤ちゃんが6〜8週目くらいのときに癒合するんです。唇と鼻の間に溝があるでしょ？ここがくっ付いた名残だと言われていいます。で、その口唇口蓋裂は、元々割れていて本来くっ付くものが、「上手くくっ付かない」という病気なんです。

はどのように対応されるんですか？

**中村** インターネットを調べると、非常に頻度の低い合併症のことなど、不安にさせるようなことがいっぱい書いてあるんですよ。そうすると、それを見てとても不安になってる親御さんが多いんです。だから、実際に治療を受けた方の写真を見せたり、合併症は実際そんなに多くないという話をしたりします。そして「基本的には治療すれば治って、お子さんは他の子たちと同じように学校に行って、社会に出て、仕事を持って、ということが出来るんですよ」と。「子どもが産まれるまで明るく過ごして、産まれたら、みんな力を合わせて育てていきましょう」と伝えます。

**杉浦** それは勇気付けられますね。

**中村** はい。で、産まれたら、ぼくらはなるべくその病院に往診に行くようにしてるんです。産まれたらすぐに連絡してもらって、親子のもとに急行するんです。それは何でかっていうと、病気がいろいろ程度があるし、お母さんたちも実際にお子さんを見てとつても悲観的になっていらっしやるからね。そこでこう言うんです。産まれたばかりのお子さんには「産まれてきてくれてありがとう」。お母さん、お父さんには「おめでとうございます。一病気があってもこの子の価値は変わらないんですよ」と、病気を含めてこの子はとても尊いんだってことを伝えます。

**杉浦** 素晴らしいです。『もみじ会』もそういった方々をフォローしていくんですよね？

**中村** そう「ピュアカウンセリング」ですね。お母さんたちは、自分の経験を、新しく生まれた病気のお子さんを持つお母さん方に生かしたいと思ってます。でも、なかなか医療者じゃない方を医療の現場に雇用できるのは難しいので、他の地域では親の会の人や自宅に行ったり、電話で話し相手になったりしている場合もあるんです。それが、鹿児島大学では、馬場さんの奥さんが大病院の看護師さんで、希望されて口唇

**杉浦** そうなんです。それでその原因は分かっているんですか？

**中村** 口唇裂や口蓋裂は、健全なお父さんお母さんから生まれるお子さんに生じるケースが大半であって、「遺伝的な要素」と「環境の要素」の多因子疾患と言われますが、どちらもはっきりとした因果関係は分かっているんじゃないんです。

**杉浦** 分からない訳ですね。

**中村** ぼくが考えるのはですね、あくまで仮説ですよ。今から何億年も前、人間はいませんでした。陸に上がった哺乳類の最初は「ねずみ」だったと言われていて、その頃から、どんどん進化していつて人間に変わっていきいんです。呼吸の機能とか、エネルギーの代謝の方法も、変化してきた。で、昔人間は、顔の形も今は違う形だった。昔、人間はみんな、唇が割れていた可能性がある。可能性ですよ。少なくとも今、我々はみんなこの形をしますけど、将来またたぶん何万年後、何億年後には、形が変わっているはずなんです。進化、変化していくためには、今、少し違う形のもが出てこなければいけない。それが『口唇口蓋裂』の子どもかもしれないんです。

**杉浦** なるほど！

**中村** あくまでぼくの仮説ですけど、進化の過程でそういったことが起こる仕組みがあるんじゃないかと思うんですよ。

**杉浦** そう考えると、すべてにおいて、病気が障害の見方が変わりますね。

**中村** 500人に1人の口唇口蓋裂の子どもたちは、大きな仕組みの中で、目的をもつて、あるいは役目を背負ってこの世にやってきているんじゃないかと思うんです。例えば、がんのなりやすさとか、アトピーのなりやすさとか、糖尿病のなりやすさとか、それぞれが違う個性を持って、それを役割として、みんなが共有して持っている。それが口唇口蓋裂のように、生ま

口蓋裂の外來で働いておられます。だから馬場さんは、経験者として、医療者として、口唇口蓋裂の子を持つ親をフォローできる。馬場さんの力は、それはそれはすごいんですよ。携帯に保存してある銀次郎くんの写真をそのお母さんに見せて、「うちの子もこんなかわいく、元気に生きてるよ」って。お母さんの話をじっと聴きながら、最後にはこう言うんです。「それは不安だよ。でも思いっきり泣きなさい！私もやっぱり最初はそんなふう泣いたのよ。だけど、赤ちゃんの前では泣くのはやめてしっかり育てましょうね」って。だからいつもお母さんは目を赤くして帰られますよ。大きな心の支えになってるんじゃないかな。

**杉浦** 医療関係者じゃなくても、経験者が必ずそこにいてフォローできるとい体制が出来るいいですね。

**中村** そうですね。また、馬場さんと同じように外來の看護師さんが受付でも、「ああ、よく来たね」とか、「元気になる？」、「大きくなったわね」とか、そんな言葉を掛けてくれます。そうすると、とっても患者さんと医療者側の距離が近くなる。看護師さんたちがいつもそうやって温かく迎えてくれてゲートキーパーになってくれるので、本当に今、鹿児島大学の口唇口蓋裂の外來はとっても素晴らしい雰囲気ですよ。

**杉浦** 家庭ではやっぱり、夫婦で支え合っていくことが大事ですよ。

**中村** ええ。一人で力を合わせて、子どもの育児をして、病気のことを知ろうとしてほしいです。鹿児島は里帰り出産が結構多くて、夫婦が離れ離れになるケースが多いんですが、本当はお父さんとお母さんが一緒に来てほしい。なかなか難しいことですが、夫婦揃って子どもを元気に育てていくことが大切ですよ。

**杉浦** ちょっと耳が痛い(笑)。自分も妻に任せっきりで、あまりできていないような…。それにひきかえ、さきほどの馬場さんの夫、馬場隆行さんは素晴らしいですよ。

れながらに病気として生まれるか、大人になって出てくるかの違い。それぞれ意味や役割は違えども、次の世代への橋渡しとして、多様性を生む要素をみんな持つてるんじゃないかと思えます。だからこそ、病気を保持して生まれてきた子たちに言えるんです。「みんな一緒にんだよ」って。

**杉浦** なるほど、「次の世代へ」なんて考えたことなかったです。いっそ、病気のことを「進化の過程」なんて呼んだらいいですね。

**中村** そうかもしれないですね。口唇口蓋裂の子だけが特別じゃなくて、みんな一緒に、みんな特別なんですよ。



インドネシアの口唇口蓋裂の赤ちゃん(女の子)

← 15年後



2度の手術を経て15歳になりました。手術の執刀は2度とも中村教授

■一人一人に  
**杉浦** お子さんの口唇口蓋裂を告知された親御さんに

**中村** お子さんをとつても愛しているのが伝わってきますよね。だから、いろんな場面で泣かれるみたいです。特に、銀次郎くんの最初の手術のときに号泣されたのは、忘れることはできません。

**杉浦** 先日馬場さんにもインタビュさせていただいて、何度も涙ぐまれて、その銀次郎くん、凛子ちゃん(双子の妹)への愛の深さに、本当に感動しました。一昨日のトーク&ライブ(3月13日、鹿児島みなみホール・主催まごころ)の打ち上げのときなんか、馬場さんは本当に気が利くし、優しいし、ぼくの娘のオムツを自分より手早く換えてくれて、妻に「あんな旦那さんが良かったな」なんて言われちゃいました(笑)。馬場さんから学ぶものがたくさんあります。

### ■海外支援

**中村** ぼくが一番大切にしていることは「一人を疎かにするときに医療は光を失う」なんです。本当は「一人を疎かにするとき教育は光を失う」なんですけど、それは医療でも同じかなーって思ってますよ。

**杉浦** 一人一人、丁寧に接する。そのことは、中村先生のアジアやアフリカへの支援活動にも繋がっているのですか？

**中村** そうですね。ひよんなことから、37歳のときに突然、口唇口蓋裂のチームを作る手伝いをするためにインドネシアに行くことになったんですよ。ジャカルタに家族を連れて2年間住んで、病院で毎日、口唇口蓋裂の子どもさんの治療を行いました。以来、日本口唇口蓋裂協会の海外医療援助活動に参加して、ベトナム、バン格拉ディッシュなどアジア各国、先月はアフリカのエチオピアに行ってきました。エチオピアの活動は、首都アジスアベバの大きな病院でしたが、電力事情が悪く、頻繁に停電するので、ペンライトで照らしながら手術しなければなりません。



ベトナムでの手術風景

**中村** 手術もしますが、主に、現地の医師が独立して患者さんを治せるようになるために技術指導が大事と考えています。そして、手術した患者さんを丁寧にフォローしていくことの大切さを伝えるようにしています。

**杉浦** どんな思いでされているんですか？

**中村** そうですね。人間皆平等って言いませうでしょ？ だけど実際は、やっぱり違うんですよ。生まれた国が違うとか、地域が違うだけで、病気を治して幸せな人生を歩み始める子がいれば、治療を受けられないまま大人になって、そういう人生を歩めない子もまだたくさんいますよね。治療を受けられなかった子たちに「自分の個性を出しなさい」とか、「社会に一生懸命役立とう」とか言っても、とっても難しいんです。「幸せの格差」みたいなのがやっぱりあるんです。

**杉浦** 「幸せの格差」を少しでも埋めるために現地に行く？



ベトナムにて、患者診察風景

**中村** そうですね。必要な医療がすべての人に平等に受けられたら、世の中ももっとみんな幸せになるんじゃないかなって思うんですよ。だから、あきらめずにその日が来ることを信じて、ぼくらのできる範囲内で、できることをやるんです。

**■スタートラインで**

**杉浦** 最後に伝えたいことはありますか？

**中村** 人として生まれて、いろいろな病気を抱って生まれる子もいれば、そうでない子もいる。でも、それぞれの子がそれぞれ幸せな人生を選べると思うんですよ。それには、親をはじめ周りの人がその子を認めてあげること、またその子自身が自分を認めてあげることが大事。それができるかどうかによって、とっても不幸な人生を歩む人と、幸せな人生を歩む人と、違いが出てくる。ぼくは、人が人に対する肯定的な気持ち、優しさ、思いやり、愛、そういったものをこの世界に蔓延させたいんです。病気を抱って生まれても、やっぱりみんな幸せになってほしいから。

**杉浦** さつきも言いましたように、『もみじ会』の皆さんは、本当に愛と思いやりに溢れているなあと思います。あの中にいると、本当に温かくて幸せでした。この世界が『もみじ会』のような温かい空気に包まれてほしいです。

**中村** ありがとうございます。それと、この『もみじの会』のテーマが「生まれてくれてありがとう」なんです。そのことをもう少しお話しさせてください。赤ちゃんが生まれて、初めて見たお父さん、お母さんが心配そうな顔をしていたら、その子はきつと「自分は何かあったのかな？」「自分は生まれてきてよかったのかな？」って思うでしょ。皆が笑顔で「生まれてきてくれてありがとう」って気持ちで迎えてあげたら、どれだけ赤ちゃんは嬉しいかって思うんです。「私が生まれてこんなみんなが喜んでくれてる」「私が私に生ま

**杉浦** そんな発展途上国と言われるところで活動されて、何を感じますか？

**中村** 日本は医療も発達していて、口唇口蓋裂の子たちほとんど手術を受けられるから、恵まれていますよね。発展途上国では、やっぱり手術を受けられない子がたくさんいます。この子らを疎かにしていたら、いくら手術の腕が上がって、「いい仕事ができるようになった。これが自分の目指してきたところだ」と言っているけど、それは何か違うんですよ。私の良心というか、心の真ん中で違和感を覚えてしまう。日本人だろうが、他の国の子だろうが関係なく、どの子も同じように価値があつて、どの子も公平に病気の悩みから開放してあげたいんです。そうするとやっぱり、日本の医療ももちろん大切だけど、やっぱり発展途上国の医療の進歩に尽力するのが特に大切になって思ったんですよ。

**杉浦** 具体的にはどんなことをされるんですか？

れてよかった。私を生んでくれてありがとう」って気持ちになるんです。

**杉浦** そんな風にこの世のスタートラインを迎えられたら、口唇口蓋裂に限らず、たとえ、病気や障害をもって生まれたとしても、自分らしく生きていける道筋が明るく照らされるんじゃないでしょうか。存在そのものをまず、肯定してあげる。育てていく中で、「病気や障害がその子の価値を変えることはない」という思いで、ずっと「大丈夫だよ」って言ってあげたら、自分を肯定して生きていけると思います。

**中村** そうですね。「大丈夫だよ」の原点、出発点は、やっぱり、「生まれてくれてありがとう」「生んでくれてありがとう」なんですよ。それが『もみじ会』のテーマでもあります。

■夢

**杉浦** 最後に、中村先生の夢を教えてくださいませんか？



若い頃、インドネシア時代(中央が私)画像編集後

しいでしょうか？

**中村** 言っていないんですかね。最後の話になってしまふんですけど。日本の大学に在る間は、自分がいろいろ経験したことをたくさん若い人に伝えて、その後は、日本を離れて東南アジアかアフリカでもいいですけど、その非常に辺りな所、実際に医療があんまり発展していない所で医師を育てるお手伝いをする。そこで人生を終えたいと考えています。

**杉浦** 老後はのんびりじゃなくて、最後まで、自分の使命に徹するんですね。かつこいいです！そこまで中村先生を突き動かすものは何ですか？

**中村** それは「恩返し」ですかね。先ほどインドネシアで2年間働いたって言いましたでしょう。その当時は私もまだ若かったんで、上手くいかないこともたくさんあって苦しんだんですよ。でも、そんなときに、現地の人が本当に温かく励ましてくれて、乗り切ることができたんです。今でも当時のことを思うと胸が熱くなります。あの励ましがなければ、自分はどうなっていたんだらう・・・ってね。現地のスタッフや患者さんの家族とも、とても強い絆ができて、今でも、定期的に当時の患者さんが成長するのを見にジャカルタへ行っているんですよ。それ以来、国や人種は違えども、人と人の繋がりは同じだと思っています。そして、どんなに貧しい国の子どもでも幸せに生きる権利は平等にある。自分の分野で、一人でも多くの子どもたちに、幸せに生きる機会、チャンスを作ってあげることが、私のできる「恩返し」だと思っています。

**杉浦** 素敵です。ほくも海外に目を向けたくありません。今度、ぜひ、一緒に海外に行きたいです！最後に、何か言い残したことはありませんか？

**中村** そうですね。「健康人」とか「病人」とかかっていう区別は、ある意味、健康だと言われている人たち、メジャーな人たちの「エゴ」なんです。自分たちが健康で、正常で、そうじゃない方が異常だと決め付けて

